

いわての農地と水路づくりの物語

農業農村整備「紙芝居」の紹介④ 農林水産部農村計画課

農業農村整備紙芝居は、郷土の先人達が築き上げてきた農地や農業用水の開発の歴史を、次代を担う子どもたちに伝え、ふるさとへの愛着や施設への愛護心を持ってもらおうと、岩手県農林水産部が平成12年から取り組んでいるものです。

現在は、全門話をそろえ、毎年、小学校の出前授業や「いわて環境王国展」などの各種イベントで上演し、好評をいただいています。

このコーナーでは5話（毎回1話）に分け、農業農村整備紙芝居の内容を簡単に御紹介します。第4回目となる今回は、旧胆沢町の寿安堰（じゅあんぜき）にまつわる物語です。はじまり、はじまり。



⑦そんなある日、寿安さんは政宗公に呼ばれました。「頑張っているようだ。…寿安よ、キリシタンをやめてくれぬか…」江戸幕府の命を受けての苦渋の宣告でした。



③福原とは、胆沢・水沢にまたがる地域です。「え～、私は後藤寿安といいます。困った事があったら何でも言ってください！」気さくな寿安さんは、すぐに領民と打ち解けました。



⑧政宗公の気遣いは痛いほど感じるものの、信仰を裏切ることのできない寿安さんは、福原を去りました。工事半ばで寿安さんがいなくなり、領民は悲しみと不安でいっぱいでした。



④ある日、荒れ果てた田んぼで領民が途方に暮れていました。「寿安さん見てください。この辺の田んぼはちょこっと日照りが続いただけでこの有様なんですよ…」



⑨そんな中、立ち上がったのは寿安さんの弟子の千田左馬（ちださま）と遠藤大学（えんどうだいがく）でした。二人の呼びかけで、工事は再開し、8年がかりで堰が完成したのです。



⑤「なんとかせねば、領民が飢えに苦しむ！」寿安さんは早速、現地の調査を始めました。「ふむ、胆沢川から水を引くことさえできれば、豊かな土地に生まれ変わるはずだ！」



①江戸時代の始め、後藤寿安（ごとうじゅあん）という人がいました。寿安さんは伊達政宗（だてまさむね）の家来で、西洋の文化と知識に富む、熱心なキリシタンでした。



⑩この堰は、「寿安堰」と呼ばれ、400年近く経った今でも地域に親しまれています。ところで、福原を去った寿安さんは、その後、どうなったのでしょうか？きっと…（終）



⑥西洋の土木技術にも精通する寿安さんの指揮のもと、胆沢川から田んぼへ水を引くための堰を造る工事が始まりました。領民の協力により、工事は着実に進んでいきました。



②ある日、政宗公は城に寿安さんを呼びました。「寿安よ、北にある福原をお前に任せる」「ええ～、私ですか！」とは言いつつも、寿安さんは内心わくわくしていました。

お問い合わせ  
岩手県農林水産部農村計画課  
電話：019-629-5666

・農業農村整備紙芝居は下記ホームページでも閲覧できます。  
岩手県公式サイト → 農業農村紙芝居 でサイト内検索  
・モバイル版は右のバーコードからアクセスできます。

